

助産師の教育強化

産科医不足で相互派遣・研修

産科医不足が深刻化する中、助産師への期待が高まっている。鹿児島県や看護協会などは、助産師の資質向上のために、就職後の教育体制を強化。病院間での相互研修、新人や中堅助産師のための合同研修などを開始し、能力の底上げを図って

いる。

3月末、鹿児島市の柿木病院に、鹿児島市立病院から研修に来ていた助産師・川越真衣さん(31)の姿があった。2月末からの約1カ月、柿木病院で1件の分娩を担当した。「これほど連続してお産につくのは初めて。学ん



だことを、時間があまりたたないうちにまた経験して実感できる」

と研修の意義を実感する。

助産師は妊婦健診から分娩、産後の母子のケアまで、安全で安楽な出産をサポートすることが仕事だ。ただ、働く病院の機能によって、関わる場面は異なる。

鹿児島市立病院は、

周産期医療の中核となる総合周産期母子医療センターだ。川越さんは6年間、緊急時対応や帝王切開などのリスクがある分娩や異常の早期発見などの経験を重ねてきた。一方で、取り上げた自然分娩は60件と「経験年数にしては、少ないという思いがあった」という。そこで、助産師を施設間で派遣しあう県看護協会の相互研修に参加した。分娩数が増えただけではなく、「育児教室、母親学級などを見学して視野が広がった」と振り返る。

◆ ◆ ◆

これまでの妊婦健診や出産は、低リスク・高リスクともに医師が関わる場面が多かった。しかし助産師も妊婦をサポートする高い技術や専門性を持ち、正常分娩であれば赤ちゃんを取り上げることができる。国は産科医不足を背景に効率的な医療を進める観点から、正常分娩を医師と連携して助産師自らが扱うことを推進している。

そこで国や県は資質向上への取り組みを強化。助産師の相互研修

は、実践能力強化を目的に2014年度、厚生労働省のモデル事業として始まり、15年度からは県が県看護協会に委託する。

鹿児島大学病院や鹿児島市立病院などの高リスク分娩や帝王切開が多い病院と、低リスク分娩が多い病院で相互研修し、14年度は3施設4人、15年度は6施設12人が1人1週間から1カ月参加した。

柿木病院からも、市立病院と大学病院に研修に行った。有馬睦子総師長(47)は「緊急度やリスクの高い人のケ

アを学ぶことができ」と説明。県看護協会コーディネーターの有村京子さん(68)は



「他施設の機能を知る機会でもある。受け入れ施設も、自分の病院を見直すいい刺激になる」と話す。

◆ ◆ ◆

県看護協会は県の委託で13年度から、1、3年目の新人助産師を対象に5日間の合同研修会を実施する。15年度は、9施設19人が参加した。

助産師1年目で参加

柿木病院で研修する鹿児島市立病院の助産師・川越真衣さん(左) 3月22日、鹿児島市の柿木病院

した愛育病院の上園志歩さん(23)は「現場で学んできたことの意味や技術のコツをあらためて確認できた」と振り返る。普段は接点がない他施設の助産師とも交流でき「刺激を受け、同じような悩みを抱えていることに共感した」と話す。

翌年の14年度からは中堅のための研修プログラム(4日間)が、

鹿児島大学の公開講座としてスタート。助産師の能力を認証する全国共通の仕組み「アドバンス助産師」認定に必要なプログラムも盛

り込む。

県看護協会助産師職能理事で、鹿児島大学教授Ⅱ助産学Ⅱの吉留厚子さん(60)は「以前は、助産師が就職後に学ぶための県全体での取り組みはほとんどなく、各自の努力に任されていた」と話す。

近年は研修の充実を理由に、県内に残った学生も出始めた。「研修の充実、助産師の学ぶ意欲の向上や、ネットワークづくり、県内の助産師確保などの助けになっている」と

手応えを感じている。(川畑美佳)